共同運営部門：リハビリテーションセンター

＜スタッフ紹介＞

役　　職	スタッフ名
センター長 リハビリテーション科部長	小野　秀文
副センター長 循環器内科主任部長	習田　龍
副センター長 リハビリテーション部門長 （理学療法士）	津野　光昭

＜関連部署＞

部署名	部署名
リハビリテーション科	リハビリテーション部門

＜特色と概要＞

リハビリテーションセンター（以下リハビリ）は、リハビリ科医師2名、理学療法士(PT)24名、作業療法士(OT)12名、言語聴覚士(ST)10名、医療事務2名で構成され運営を行っている。当センターでは、急性期病院の機能特性や地域の役割を考慮して臨床チーム（脳、循環器、整形外科、救命救急、がん、糖尿病、摂食嚥下、周産期、認知機能、小児）を構成して、臨床業務の管理・運営、教育、研究を各チームで進めると共に、専門的なリハビリを提供している。PTは歩行などの基本動作能力の向上、内部障害を有する患者へのリハビリを実施している。OTは食事動作や衣服着脱などIADL動作能力の向上、高次脳機能障害や認知機能障害患者へのリハビリ介入を行っている。STは言語機能や摂食機能の障害、コミュニケーション障害に対しての評価やリハビリの提供を行っている。特に安全な早期経口摂取に向けてチーム活動を行っている。当院の特徴として、救命救急センターを併設しており、重症患者に対しても救命センター医師・集中治療医と連携し早期リハビリ介入を行っている。また、当院は脳卒中、急性心筋梗塞などの重傷患者を積極的に受け入れており、それらに対しても入院翌日よりリハビリ介入し、早期離床、早期日常生活への復帰に寄与している。心疾患患者については、退院後外来にて、栄養指導、生活指導と共にエルゴメーターやレジスタンストレーニングを継続して実施し運動能力向上、再発予防に努めている。臨床チーム以外には、学術チームと教育チームを構成している。学術チームでは、学会発表や論文投稿における院外への発信の量と質の担保を支援するため、大学院修了者や学術的取り組みの経験の豊富なスタッフを配置している。一方、教育チームでは、多岐にわたる病態の患者にも対応できるように、新卒1年目から始まるキャリアラダーを構成している。入職5年間で総合的視野を持った療法士を養成し、それ以降はより専門性を高める環境整備をしている。入院患者への継続したリハビリを提供するために、土・日・祝日にもリハビリを実施している。隔離を要する感染患者に対するリハビリにも、感染対策を行いながら早期介入を行っている。

＜実績＞

（表1）　リハビリテーション科患者数

年度	外来	
	延べ患者数	1日平均
2019年度	1,053人	4.4人
2020年度	969人	4.0人
2021年度	978人	4.0人
2022年度	919人	3.8人
2023年度	1,268人	5.2人

（表2）　2023年度リハビリテーション部門実績

	新患数(延べ人数)	実施単位数
理学療法部門	56,633名	85,954単位
作業療法部門	27,917名	43,411単位
言語聴覚部門	14,512名	18,858単位
心臓リハ外来	1,076名	3,228単位

＜今年度の反省と来年度への抱負＞

PT部門では、がんチームは術前リハビリ動画を新たに作成して視聴していただくことで呼吸機能、運動機能低下防止への働きかけを行った。今後は効果判定を含めて検討を行う。昨年度立ち上げた周産期チームは帝王切開術後初期離床から介入を開始し、両親支援学級、マイナートラブルの介入を行っており、今後も対象疾患を拡充しながらより一層充実させていく。教育面では、新人教育、集中治療領域ともに当院キャリアラダー目標に到達することができた。OT部門では、各患者に応じたADLシートを作成して病室に掲示することで病棟との情報の共有化を図った。認知症ケアセンターへの参加も継続的に実施しており、集中治療病棟から認知機能低下・せん妄予防に努めている。ST部門では、摂食嚥下支援チームの中心的役割を担い、各病棟に対して各患者の嚥下状態を「食べる時の注意点」を用いて情報共有を行った。それにより統一した嚥下指導を行うことができ、学会発表にて成果報告を行った。また年間135件の嚥下造影検査、嚥下内視鏡検査を実施し、客観評価に努めた。感染管理については、部門内でアルコール使用の徹底、リハビリ実施時には感染対策室のシャドーにて感染対策方法の確認や研鑽を行った。

今年度の反省点として、集中治療領域でのシームレスなリハビリの提供方法の検討、教育面ではPT・OT・ST間での教育内容の差異を認めた。上記事項を来年度の課題とし、より発展的なリハビリテーションの提供に努める。